

いちじく【品種】榊井ドーフィン

目標収量：2,000kg/10a

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
生育	発芽期					果実肥大期						
	伸長期					収穫期			落葉期			
管理作業	剪定 →		草刈		草刈		← 防除 →		← 実肥 →		← 剪定 基肥	

栽培の要点

1. 果実品質の向上及び結果枝の適正本数確保と着色の向上
2. 適期収穫の実施
3. 作業の能率及び効率性に優れる一文字整枝

栽培の手引き

1. 品種

収量、果実の大きさで市場性に優れる「榊井ドーフィン」とする。

2. 植栽距離と植え付け方法

(1) 植栽距離

作型 整枝	ハウス栽培		露地栽培	
	列間×株間	植栽本数	列間×株間	植栽本数
一文字整枝	1.8m×5.0m	111本/10a	2.0m×5.0m	100本/10a

(2) 植え付け方法

- ① 水田に植え付ける場合は明渠や暗渠により排水に努める。
- ② 適正酸度は中性ないし弱アルカリ性のため石灰質資材で矯正する。
- ③ 植え付け時期は11～12月または3月に行う。
- ④ 根は軽く切り返し、広げて植え付ける。苗木は地上部50cmで切り詰め、切り口にトップジンMペーストを塗る。

3. 新梢管理

(1) 芽かき

- ① 結果母枝あたり1本の結果枝を育成する。
- ② 強勢な結果枝となりやすい上芽は早期に除去する。
- ③ 下芽、横芽を中心に残す。
- ④ 芽かきは2、3回に分けて行い、強い徒長芽の除去により枝の強さを揃える。
- ⑤ 総芽数は10a当たり2,000本を標準とする。

## 〔いちじく-2〕

### (2) 結果枝の誘引

- ① ハウス栽培ではパイプを利用して誘引線を張り、ひもやビニールテープ等で新梢を吊り上げる。
- ② 露地栽培では誘引棚を設置するか又は新梢ごとに支柱を立て誘引する。
- ③ 誘引は、結果枝が40～50cmに伸びた頃から行い、7月中旬までに数回行う。

### (3) 摘心

ハウス栽培では18節、露地栽培では14節を目途に7月上～中旬に摘心する。摘心後に副梢が多発する場合は先端のみ1葉残して摘心し、伸びてきたらその都度摘み取る。

## 4. 無加温ハウス栽培の管理

### (1) 温度管理

- ① 3月中旬にビニール被覆し、発芽までは15℃以上、30℃以内に温度管理する。ただし、この時期の乾燥は発芽障害を起こしやすいので湿度はなるべく高く管理する。
- ② 発芽後は昼温25～30℃、夜温はなるべく高くなるよう管理する。とくに発芽後は夜温が5～7℃になると生育遅れが発生する。
- ③ 展葉期から収穫始めまでは昼温25～30℃とし、35℃を超えると飛節（着果しない部位の発生）になりやすいうえ、軟弱徒長になるので注意する。

### (2) かん水

- ① 被覆前にたっぷりかん水し、以後は5～7日間隔で土壌が乾かない程度に適宜かん水する。
- ② 発芽までは幹が乾燥し易いため、4～5日おきに幹に散水すると発芽が促進される。
- ③ 発芽から収穫期前までは表土が乾かない程度に株元へかん水する。
- ④ 収穫期には2～3日おきに株元へかん水する。

## 5. 熟期促進（エスレル処理）

### (1) 処理適期

- ① 表皮の色が緑色から淡黄緑色に変わったとき
- ② 果頂部の目が赤みを帯びて隆起し、花托内部の小果（雌花）の全体が赤く（ピンク色）着色したとき

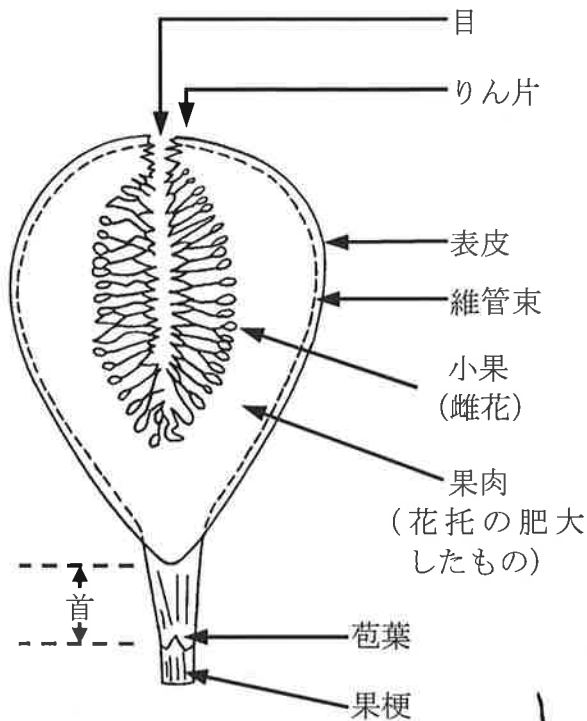
### (2) 処理濃度と方法

- ① 処理濃度は8月上～9月中旬の気温が高い時 エスレル10の1,000倍液。
- ② 気温が低下する9月中・下旬以降は500倍液。
- ③ 処理方法はハンドスプレーで果実に直接噴霧（0.5cc）する。
- ④ 1回あたり2果程度を処理し、通常4～5日間隔で実施する。処理部分は果頂部で、目周辺部のみに散布すれば良い。

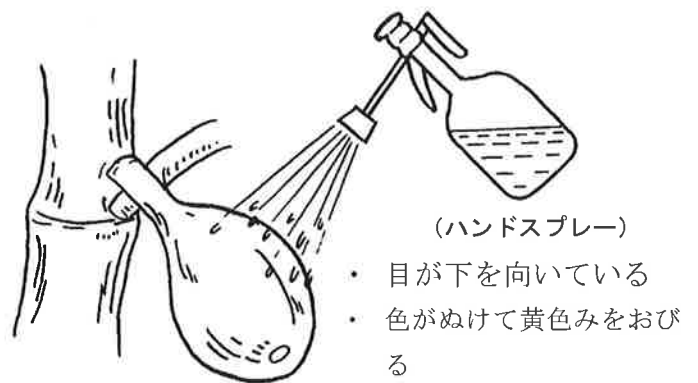
### (3) 処理上の留意点

- ① 噴霧後の降雨は、2時間以上経過すれば効果に影響はない。（噴霧直後の降雨は効果が低下するが再処理はしない。）
- ② 樹勢の強い樹では、着色不良や裂果を助長し、樹勢の弱い樹では効果が低い。
- ③ 8月下旬から9月上旬の噴霧では、処理後5～6日で成熟するが、処理時期

が早いと果皮は着色するが、果肉の水分が少なく糖度の低い果実（スポンジ果）となる。



イチジク果実の縦断面模式図



エスレル処理の方法

## 6. 収穫

### (1) 着色程度

- ① 8月中下旬 ----- 果実表面の60~70%
- ② 9月中下旬以降 ----- 果実表面の80~90%

### (2) 果実の熟期

- ① 適期は1~2日しかないので適期収穫に努める。
- ② 過熟果は腐敗発生の原因となるので出荷しない。
- ③ 降雨後の収穫では、腐敗果が発生しやすい。

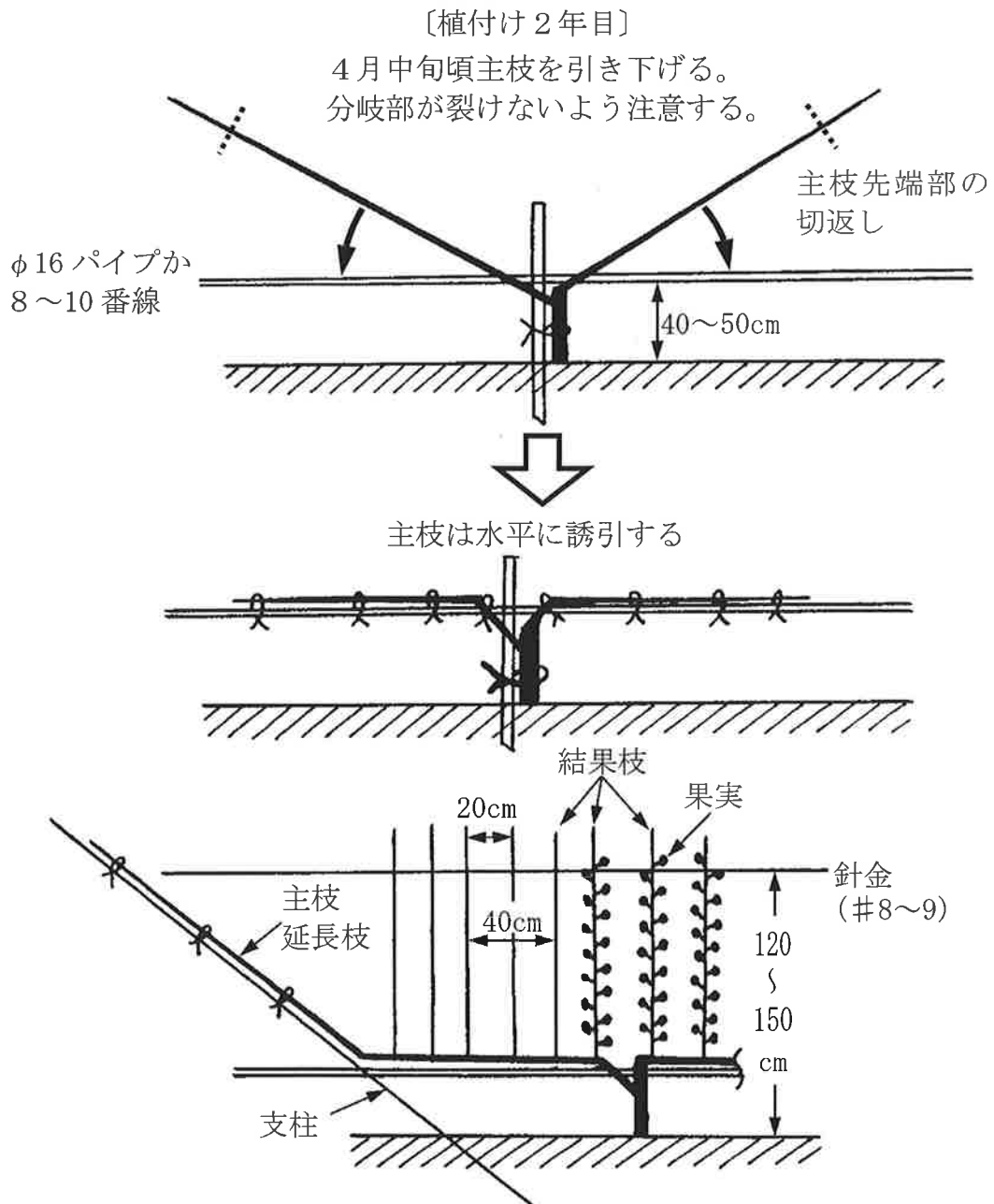
## 7. 整枝・剪定

### (1) 一文字整枝

- ① 結果母枝（前年の結果枝）は2芽残して3芽の直下で切る。
- ② 主枝延長枝は水平に誘引し、充実した部分を残し切り返す。
- ③ 結果枝の間隔は、最低でも40cm以上あける。
- ④ 主枝延長枝は隣の樹の主枝延長枝と重なるまで伸ばす。

## 【いちじく-4】

### 一文字整枝の仕立て方



## 8. その他の管理

### (1) 鳥害

園全体を30mm目以下の防鳥網で覆う。

### (2) 主幹部の日焼け防止

枝幹に白塗剤を塗布する。

### (3) 凍霜害

ハウスでは霜のおそれがある場合、保温用ローソクやストーブで暖める。  
常発地では枝、幹にわら巻き等を行い被害を軽減する。

施肥基準

(kg/10a)

肥料名		総量	基肥 (12~3月)	追肥 (7月上旬)	追肥 (8月上旬)	追肥 (9月上旬)
粒状固形30号		140	80	20	20	20
石灰類 (マグフミン)		80	80			
重 焼 燐		40	40			
硫 酸 加 里		10		10		
成分量	チ ッ ソ	14.0	8.0	2.0	2.0	2.0
	リンサン	28.0	22.0	2.0	2.0	2.0
	カ リ	19.0	8.0	7.0	2.0	2.0

病虫害防除 別紙「病虫害防除暦」を参照

対象病虫害	薬 剤 名	安全使用基準			備 考
		希釈倍率等	収穫前日数 (~まで)	使用回数 (以内)	
ハダニ類	石灰硫黄合剤	7倍	発芽前	—	
	ニッソラン水和剤	2,000~ 3,000倍	前日	2回	
アザミウマ類	アディオオン乳剤	2,000倍	前日	2回	
	スカウトフロアブル			3回	
カミキリムシ類	ガットサイドS	原液塗布	7日	3回	
	園芸用キンチョールE	専用ノズルで噴射	前日	2回	クワカミキリ対象
疫 病	Z ボ ル ド ー	1,000倍	—	—	
黒 か び 病	トップジンM水和剤	1,000~ 1,500倍	7日	5回	トップジンMは、 散布・灌注・塗布 の合計で6回以 内(うち散布は5 回以内)
切り口及び傷口の ゆ 合 促 進	トップジンMペースト	原液塗布	剪定整枝時、病患部 削り取り直後、及び 病枝切除後	1回	
株 枯 病	トップジンM水和剤	500倍 (1% <sub>100</sub> 灌注/株)	30日 定植時および 5~10月	6回	

平成27年度 いちじく病害虫防除暦

(平成26年12月作成)

回数	散布時期	生育状態	対象病害虫	防除薬剤・濃度	薬剤量		注意事項	
					(100%)	10a当散布量 動噴		
1	4月上旬	発芽前	カイガラムシ類、ハダニ類、越冬病害虫	1.石灰硫黄合剤	7倍	14.3%	200%	晴天無風日に樹全体にたっぷりと散布する。
2	5月下旬	展葉期	疫病	1.Zボルドー 2.クレブリン	1,000倍 200倍	100g 500g	200%	Zボルドー等の銅剤による葉害軽減のため、クレブリンを加用する。 アザミウマ(スリップス)発生軽減のため園内外の除草に努める。 疫病の常時発生園では園内の排水と風通しの改善に努める。
特	6月上旬	根部最高伸長期	ネコブセンチュウ	1.ネマトリンエース粒剤	20kg/10a			樹冠下全面に処理し、可能であれば土壌混和をする。
3	6月上旬 ～中旬	着果始め	疫病 アザミウマ類、カイガラムシ類	1.Zボルドー 2.クレブリン 3.モスピラン水溶剤	1,000倍 200倍 2,000倍	100g 500g 50g	250%	疫病の発病果、発病枝葉が伝染源となるので見つけしだい除去し、園外で処分する。また、園内の通風と日当たりを良くする。 アザミウマは果頂部に穴(目)が開き始める頃から防除する。
4	6月下旬	果実肥大初期	アザミウマ類	1.ダントツ水溶剤	4,000倍	25g	300%	アザミウマの発生は、5～6月に乾燥が続くと多発する。
5	7月上旬	果実肥大期	疫病 アザミウマ類、キボシカミキリ	1.ランマンフロアブル 2.モスピラン水溶剤	2,000倍 2,000倍	50cc 50g	300%	カミキリシジメ類の成虫出現は、7～8月頃で成虫は見つけしだい捕殺する。 樹からカミキリシジメの虫フンが出ている箇所を見つけ次第、園芸用キンチョールEを液が逆流するまで食入孔へ注入する。
6	7月中旬	果実肥大期	疫病 ハダニ類、イチジクモンサビダニ	1.Zボルドー 2.クレブリン 3.ダニトロンフロアブル	1,000倍 200倍 2,000倍	100g 500g 50cc	300%	疫病等病害果は、園外へ持ち出して処分する。 梅雨明け後の高温乾燥はハダニの発生を助長するので注意する。 ハダニ防除は、発生初期の防除を徹底し、同一、同系統薬剤の連用は避ける。
7	8月上旬	収穫前期	疫病、さび病 アザミウマ類	1.アミスター107フロアブル 2.ダントツ水溶剤	1,000倍 4,000倍	100cc 25g	300%	
8	8月中旬～ 10月下旬	収穫期	黒かび病、そうか病 アザミウマ類	(黒かび病) 1.トップジンM水和剤 (疫病) 1.ランマンフロアブル	1,500倍 2,000倍	66.7g 50cc	300%	黒かび病病害果等は、収穫期に降雨が続くと発生するので注意する。 発病果、発病枝葉が伝染源となるので園外に持ち出して処分するとともに、薬剤を適宜散布すること。 寒害防止のため主幹にアラなどを巻く。 雪害による枝折れや枝裂けは支柱立て等で防止する。
	12月	休眠期	寒害・雪害防止					

農薬適正使用基準 (いちじく) ※ ラベル、裏書き等で確認のこと。

[殺虫剤名]	使用時期	使用回数	[殺菌剤名]	使用時期	使用回数	[殺ダニ剤名]	使用時期	使用回数
石灰硫黄合剤	発芽前	—	Zボルドー	—	—	ダニトロンフロアブル	収穫3日前	1回
モスピラン水溶剤	収穫前日	3回	ランマンフロアブル	収穫前日	3回	バロックフロアブル	収穫前日	1回
アデイオン乳剤	収穫前日	2回	アミスター107フロアブル	収穫前日	3回	マイトコーネフロアブル	収穫前日	1回
園芸用キンチョールE	収穫前日	2回	トップジンM水和剤	収穫7日前	5回	ダニテラフロアブル	収穫前日	2回
ダントツ水溶剤	3日前まで	3回	トリアミン水和剤	収穫7日前	3回			
ネマトリンエース粒剤	60日前まで	1回						